

タイトル:平成 27(2015)年度 教育セミナー(第 11 回)

日時:平成 27 年 9 月 21 日(月・祝)～24 日(木)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

「イスラーム美術の造形表現」

榎屋 友子 (東京大学東洋文化研究所)

本セミナーでは、クルアーンにおける偶像崇拝禁止、ハディースにおける絵画非難を確認したうえで、それらと関連すると思われる具体的なイスラーム美術の造形表現について考察した。

クルアーンでは偶像崇拝を禁止しているので、イスラーム美術において神の姿形を描く造形表現は全く存在しない。しかし、偶像崇拝禁止が絵画や彫刻の禁止を意味しているのではないことは、動物・人物を含む様々な造形表現が7～8世紀に既に存在することから明らかである。他方、ハディースでは絵画が非難されているが、それは絵画が生命を吹き込むことのできない被創造物であるためである。つまり、造形表現(創造)を行うことは神の行為の模倣であり、神への挑戦とみなされたのである。そのため、宗教上使用する建物・調度品・写本では神の被創造物ではない被創造物(生命が吹き込まれない動物や人物)を描くことが忌避されてきた。このことは本来偶像崇拝禁止とは無関係であるが、後代にはこれは偶像崇拝禁止のためと解釈されることも多々あり、混同されていった。

祈りの場面で用いられる建築、調度品、写本は、動物や人物の造形表現が避けられなければならないと同時に、最も美しく装飾されなければならない対象物である。そこで、動物・人物以外の装飾モチーフを高度に洗練する必要性が生まれ、幾何学文、植物文が発展していった。また、神の啓示を伝えるアラビア語、アラビア文字は非常に尊ばれ、アラビア書道の追求が促され、宗教美術で多用されるようになった。さまざまな時代や地域のイスラーム美術に共通する、幾何学文、植物文、アラビア文字から成る文様は、宗教美術における必要性のために著しく発展し、世俗の美術にも応用された。ただし、世俗美術では動物や人物の表現はほとんどの場合自由に行われていた。

そこで、どこまでが被創造物なのか? どこまでが祈りの場なのか? 宗教的な題材はどこまで描いていいのか? という疑問が生じてくる。しかしながら、その解釈は時代や地域、宗派により多様である。今回は実例として、12～14 世紀アナトリア周辺の宗教美術に見られる特定の動物表現、写本絵画におけるムハンマドを含む預言者、聖人の表現の二つのトピックを取り上げ、その様相を具体的な造形表現を見てたどっていった。